

三河アララギ

平成二十三年

七月号

第五十八卷 第七号



ニューヨーク日記(57) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

April 13, 2011 : Millesime

Blue Shoe Diaries



ShoeLadyのお誕生日！Seanがサンフランシスコから祝いに来たよ。行くのと～っても楽しみにしていたレストラン、Millesimeでディナー。着いた瞬間からパリに居る気分！！サービスも沢山してもらって美味しい楽しい夜になりましたよ～

It's ShoeLady's birthday so Sean's here from SF to celebrate! And of course, we go to a restaurant that I've been wanting to go, Millesime. It's a place where you're instantly transported to Paris. Gorgeous restaurant! I think we had everything on the menu. The service was fantastic and it felt like a proper dinner out! Hope to be back soon!

目次

第五十八卷第七号(通卷六九一号)

表紙・隅田の花火	今泉 由利 (1)	麦の穂	山口千恵子 (26)
ニューヨーク日記(57)	Blue Shoe (2)	防人の地へ(2)	夏目 勝弘 (27)
感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より	(4)	たんぼぼ	秋山 逸穂 (28)
歌集・一本の木	杉浦 弘 (5)	五月雨	伊藤 忠男 (28)
新緑の季	岡本八千代 (6)	ユキヤナギ	白井 信昭 (28)
燕	白井 久吉 (7)	「ことよせ」	いーはとぶ (29)
ゆたにたゆたに	今泉 由利 (8)	綿毛	阿部 淑子 (29)
ぬり糸	伊藤八重子 (9)	「俳句」	植村 公女 (30)
三河訛り	青木 玉枝 (10)	私の一首	伊与田広子 (32)
凛 <small>にんげん</small>	内藤 志げ (11)		岡本八千代 (32)
「おつかさん」	弓谷 久子 (12)		小野可南子 (32)
「家はいいなあ」	安藤 和代 (13)		伊与田広子 (32)
つつましき花	胃甲 節子 (14)		伊与田広子 (31)
独り行く山	林 伊佐子 (15)		喜仙 (31)
野草凶鑑	佐々木利幸 (16)		一石 (30)
菜園	清澤 範子 (17)	贈呈誌 五月号	伊与田広子 (31)
若葉の阜月	近藤 映子 (18)	絹の話(7)	今泉 雅勝 (34)
路の群生	金津 文枝 (19)	物理学者と詩歌の世界(18)	今泉 雅勝 (34)
ほろほると	半田うめ子 (20)	鎌田敬止という人(五十五)	一石 (36)
世界旅行	伊与田広子 (21)	和歌から派生した季語の本意(その十二)	鮫島 満 (38)
フクシマ	北川 宏廸 (22)	「水魚」のことから(126)	佐藤 喜仙 (40)
介護	杉浦恵美子 (23)	ことのはスケッチ(391)	岡本八千代 (41)
国坂峠	平松 裕子 (24)	和菓子街道(57)	今泉 由利 (42)
菩提樹	小野可南子 (25)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	平松 温子 (43)

感 銘 歌

御津磯夫第二歌集 「ノボタンの窓」より

光りつつなびける花とぬれそぼちつひに動かぬ石をぞ思ふ

P
171

黄素馨ののこれる花の秀を折りて手わたしたまふ門のみぎりに

P
172

歌集 一本の木

杉浦 弘

山はらを吹きあげて行く風先に今ひるがへり白し朴の葉

疾風に向かへる鳶は六秒程ひとつところを保たむとせり

かげりたるはざまの道にいくたびか空気が冷えるところをよぎる

新緑の季

蒲郡 岡本八千代

原発の収束の兆し未だなく今年も新緑の季は来にけり

思ひ出の一こまひと一こまが甦る庭に萌え出づる木々草々に

淡あをき今日のみ空の中に映ゆ売木村よりの君がネムの木

萌え出づる草木がにほふけさの朝いづこよりかの甘きにほひす

何故に高村光太郎新緑を「素素」と言ひしかこれまた愉し

青くさきオゾンの風か何となく空しき風とおもひつつ吹かるる

庭に佇つわが目の前を小さきアゲハ二つてふてふ舞ひてゆきたり

電話にて赤児の泣き声聞かせくれぬ窓の西空はほのあかね色

ちちははへの思ひも遠くなりにつつわれが曾祖母ひいばとなりたる不思議

夕べはやくまた独りなりわれのみの握り飯一つこの当り前

燕

新城 白井久吉

花の咲く時期の寒さのためなるか今年は梅の少なしをいふ
良きことのあるやも知れず玄関の戸口の上に燕巢つばめごもる

この家を建てておほよそ三十年今年初めて燕来れり

鉢植の苺でさへも色づけば小鳥は知りて啄ついばみに来る

医師となり看護師となり勤め持つ孫思ひつつ診察を待つ

川端の田には昨夜の大雨で鮒ふなや鯰なますが上がりといふ

千郷村史(上下)二冊の新刊を見付けて急ぎわれは抜き出す

年寄りを大事にせよといふ言葉九十になりてしみじみ思ふ

この春は外に出ること少なくて知らざるうちに夏を迎ふる

植ゑ方を教へしままの馬鈴薯は莖葉も茂り花も咲きたり

ゆたにたゆたに

東京 今泉 由利

わが家に双葉のへちま加はれり二つ命のこの屋根の下

一つ打つ龍口寺の鐘の音よ一つ願ひを余韻にたくす

どこまでもどこまでも伝ひゆけ龍口寺の鐘の音ひとつ

地球より割りいだしたる単位にて私を測る162cm

じゅんさいの季節に生れし母なりきゆたにたゆたに好みしことを

ひと束を担ぎてゐたり愛知路肩よりきたる路の匂ひの

めがねを掛け3Dの映画を見めがねを掛けレーザー治療

引き返すことがあります飛行機は真白き雲の中を飛びをり

二時間をかけて真白き雲の中梅雨前線梅雨雲の中

裾まわし車輪梅の朱の色黒大島をめざしてゐたり

ぬりゑ

豊川 伊藤八重子

瓶にさす藤の花房しのびつつけふのこの日をひとり子規よむ

デイケアの卓に置かれし黄の花のこころしんばらの花に顔寄す

右身を病み左にて全てをこなす人満面の笑みをわれは尊ぶ

只只ぬりゑされどぬりゑよ今生きて無心となれるわれの一時

白妙の餅丸もちひめる懐しさ米三合の娘の家の餅搗き

終ひ湯に追ひ焚く炎の音をきく雨降らぬ今日梅雨入りとなる

青き痣二の腕にみる湯浴みしてどこでどうして打ちしか知らず

今日の日を精一杯に生きてゐる昼顔の花の絵手紙届く

忘れぬしベゴニヤに赤き花友の情なさけを思ふ花鉢

もの言はず人間杖となる次男月に一度は訪ねてくれる

三河訛り

伊丹 青木玉枝

梅雨入りの雨足しげき朝にして試歩は廊下にて暫しつづけり

百歳のあなたの今日は誕生会花束ささぐわたしの幸福しあわせ

デイに来て呆けたる人の輪の中に邪心じゃしんなき顔可愛らしき顔

バラ園にひと日巡りてバラの香に包まれ数ふバラの名札を

川土手の山ぼうし咲くひとところ折り返し点めざし試歩つゞく

九十一歳の姉と交互に電話する残りし二人の思ひ出ばかり

脚の痛みしびれる足腰耐ふることそれが仕事のやうな一日

今日の雨止む気配なし夜更けて雨音ききつつ何時しか眠る

紫のオニオンサラダの作りたて香り豊かに夕餉の食卓

伊丹に住み五年の歳月関西弁わたしは話す三河訛りに

にわたずみ
潦

豊川 内藤 志げ

豊橋の市場に通ふ道沿ひの小さき店のコーヒーが好き

玉蜀黍の畝間に広く潦雲にわたずみの流れは東に移る

北の窓遠く一面銀鼠に稜線のみみゆ本宮の山

遙かなる赤石の峰のくつきりと常帰る道に今日の発見

物置きの庇に届く竹の子と散歩の人に知らされにけり

わが音に小綬鶏二羽が小走りに首を延ばして藪に隠れる

玉蜀黍の卷葉の中に雄花の見ゆる第一回の消毒をせむ

幾度もの除草剤にも生き残る強したたか露草糸瓜の畑に

膝をつき草を取りゐる肩に触れ大梅一つ地にころがりぬ

緑ます夏椿の葉ひねもすに終日を雨の雫の落ちつつ暮れる

「おつかさん」

豊川 弓 谷 久 子

冬物を収ひ終へたりそれだけが今日のひと日の我が仕事なり

夢の中に母を呼びをり「おつかさん」と己が声にて驚き起きる

母手作りのかしわ餅の不細工をなつかしみつつ姉と語りぬ

和服姿板につきをり一代を振付師として生き抜きし兄

ひさびさに戸棚の奥より出して見る兄の自伝の「歌舞伎一代」

又雨となるらしつばめが地をすりて我が目の前を翻り翔ぶ

銀座通りと呼ばれし日もあり車のみ走り抜け行く町となり果つ

御堂山かすむは黄砂か今日一日よければそれでよしとせむ

箱根うつぎの花の散る庭デイサービスに出掛けし姉の寝巻を洗ふ

御津山は新緑となりほのあかし葉がえのもみぢと聞きし事あり

「家はいいなあ」

豊川 安藤 和代

日びテレビの震災被害に胸痛く花大根は色淡く咲く

震災の友の涙に頑張れと叫びさけびて受話器をにぎる

鴨も雀も啼けなけ元気よくけふ被災者の笑顔見たゆえ

豊田高専の宿舎に入る孫送る喜び淋しさ混りたる朝

十五才の孫の決めたる行く道よ励ますつもりが励まされるつ

「日曜には帰っておいで」孫の背になぜか涙で言葉にならず

帰るからと孫の電話を受けてより心うきうき犬も尾をふる

あと三十分寮より孫の帰り来るハミングルン汁の実刻む

「家はいいなあ」ひと言ひて大の字に孫はひたすら昼を眠れり

初夏の陽に茶のさみどりの輝けば茶摘みの父母の姿顕ちくる

つつましき花

豊橋 胃 甲 節 子

若葉に降る雨は優しく音も無く濡れて艶めく午後の裏庭

雨模様の風吹けばわが裏山の蛙の鳴く音聞く季となる

散歩より帰りて夫の髪を切る穏やかな午後の陽差しの庭に

労働の畑に明かるく笑ふ声幾年笑ひを忘るる吾かと

咲き競ふ藤の花房近く見て嬉しかりけり清しかりけり

健やかな友より三冊届く本手紙に触れざる病気の事ども

危ふき事に触れざる優しき心遣ひ今日は沁々心晴れやか

野茨もエゴ卯の花もなべて白初夏の散歩路清しさ溢れて

忍冬は細き竹にと登りゆく此処も彼処も重たく撓ひて

エゴの花数多の花は下向きに可憐な星型つつましき花

独り行く山

岡崎 林 伊 佐 子

ふる里の衛星テレビの影となる杉の大樹も倒木となり

夫と息子^こが機械にて伐る杉の木も五十年余の命終へたり

間伐の青杉散乱する山の世想おもひて山峡を行く

林道に轍の跡がくぼみをり山菜とりか迷ひし車か

林道を散歩しながら薇も蕨もつみて独りゆく山

鳥影も生き物も見ぬ林道に蛇苺の実の紅熟が目立つ

帰省する山家の暮らしは山水を引きて風呂焚く昔のまんま

屈まりてなすこと多き畑仕事こころ遊ばす独りの時間

春菊の群れ咲く畑の紋白蝶向きを変へたる微風のゆくへ

畑にておにぎり食べる真昼どきひもじき栗鼠が近寄りてきぬ

野草図鑑

豊橋 佐々木利幸

降雨の今日は老の遊びと思ひつつ臨書して居り欧陽詢の法帖

欧陽詢の法帖を臨書する沈着なる用筆に我は関心を持ちて

二百種が載る野草図鑑もリュックサックに入れて出たり撮影実習に

万葉集に詠まれたる藤を今日は撮りぬ笹頭の山裾に来て

おろおろと田峯観音の石段を膝が疼痛する我は上り居り

高勝寺への道を歩みつつ壺堇も立壺堇も我は撮りたり

勝頼が来襲したる田峯城の城跡を今日は行くこともなく

一万歩も今日は歩きたり稲の苗を植えたる島田の棚田も撮りて

野草図鑑をポケットに入れて神田川の堤を今日も散策して

撮りたしと思ふ菖蒲を見つけたり神田の堤を散策をして

菜園

春日井 清澤 範子

北西の風強く吹くこの夜は電車のきしむ音近く聞こゆる

剪定せし椿の枝に五月雨新葉をぬらし光るその先

三日程真夏日の後しとしとと降る雨吾の心を癒やす

マグニチュード9・0の東北地震両陛下見舞はれるお姿写しぬ

小じんまりと庭の椿を剪定せり残す枝先新緑若葉

雨の中全国植樹祭の中継あり三本つつの両陛下のお手植

菜園の雑草取り来る夫の手の咲きある草花花びんに活ける

母の日にケーキとカクタスをプレゼント娘はギョツと手を引きくるる

震災より二ヶ月の今日台風一号発生の天気予報を聞く被災者思ひて

歳老ひて庭の剪定出来ざれば庭師頼みて納得の夫

若葉の皐月

名古屋 近藤 映子

藤ヶ丘まで櫻並木の続く道若葉は日毎に濃緑となりて

夫の熱下りてホットしたれども握手する手の弱き力に

顔見れば声は出さねど我夫の落着きてをり安堵するなり

朝早く息子より届く青いカーネーションの大き花束を

息子より早朝宅配届きたり青いカーネーションの大き花束

母の日に正方形のデコレーションケーキ娘より新鮮苺の薫りをり

此年も五月十日を迎えたり夫のバースデー大切な一日

萬葉研究会の資料を送り届けくださる先生のお心遣に感謝く

五月雨の続くよ皐月の中葉なる雨の続くは気の重し

物言えねどテレビドラマに涙するわが夫吾の左手握りて

路の群生

島根 金津 文枝

藤の花椿の花辨雪の下蓬も天麩羅にする今宵の夕餉

宮裾に露の群生取りし今日爪も指も苦汁に眞黒

雨続き松江へ墓参も出来なくて花屋に頼むも唯案ずるのみ

雨続き理髪店に行けずして三ヶ月間延び放題なり

春蘭の二鉢に思はぬ花嬉し柊の実の青々粒も喜べり

三河アララギ六月号の表紙菖蒲色良くわれもハガキに書きたし

好きな湯浴嬉しわが町に温泉の湧き出る所あり三男に連れもらふ

朝日新聞デジタル三、八〇〇円二〇二一年五月予約して置く

東北関東大震災後宮森に鶯季節はずれしきり啼く

ホームレスの公田さん歌集が出来たと新聞を見し

ほろほろと

新城 半田うめ子

神社にて杉林の中ほろほろと鳴きてゐるなり山鳩数羽

雨の音厳しかりけりわが猫は室の中にてあちこち歩く

孫香奈のもち来たるなり味のよく名産なりきうなぎの白焼き

滝の湯のグランドホテルへ久々に孫と来たりて楽しみてをり

信号の無視なり若者大きなオートバイ乗り命終りぬ

里芋を掘りて手に豆の出来泣きをりたりき姑きびしく

東上の高柳様に貰ひたるあずまえびすの南瓜の美味き

貰ひたる赤玉葱のめずらしく味のよくして楽しみて食む

棟上げをして居りしがわが村へ知らぬ人にて住むと言ひたり

世界旅行

豊橋 伊与田広子

世界旅行テレビ見ながら見入るなりウィーン市内音楽鳴りて

ベートウベンベートーヴェンのクロイツァーの鳴り出してベートウベン像チュウリンゲンの森

一生に一度は行きたし思ひをり世界旅行は叶へられず

われ一番行きたし思ひをり音楽の都ミヤコウィーンなり

浜岡の原発停止命令にほつとしたりし東海地震

日本地図調べて見れば原発は海沿ひの地に点在しをりぬ

原発事故再び起くれば国中は汚染となりて逃げ場失ふ

汚染水海に流るれば周辺国ばかりか世界中より嫌はる

避けられぬ地震津波は先づ命守ること逃ぐるが勝ちぬ

住む所東海地震起り得る地震に強きと我が家を建てぬ

フクシマ

東京 北川 宏 廼

福島がフクシマとなり原発は田植を奪ひ牛を殺しぬ

口ぐせになりし言葉の「あの日から」われら自らが変らねばならぬ

「頑張つてー」といふCMを聞くたびになぜか静かに腹が立つなり

その昔神はかまどに御座おはしますいま原子炉に神はいますか

唯一の被爆国たる日本の原発被曝おが世界をゆるがす

垂れ下がる蛍光灯のスイッチの鎖くさりが揺れて震度3かな

スイッチに取り囲まるるわが暮らし計画停電に計画立たず

さて次はもぐら叩きの如くして次の手さぐる炉心冷却

三月に安全神話を唱えたる専門家たちよいずこに消えしか

液状の道路となりしニュータウン等間隔にゆがむ街路樹

介 護

蒲 郡 杉 浦 恵 美 子

目の前の夫の顔色それのみが我が関心事今日も暮れたり
平日も土日もなく明け暮れは介護のみにて細々生きる
昨日には出来たることが今日出来ぬ夫の衰へ加速してゆく
我が夫のスキー仲間が来てくれる今朝からそわそわ待ちかねて居る
今は最早スキーは出来ぬ悟りたる夫は托しぬ山の仲間
雨の中友がクルマにスキー積む様子を夫はじつと見てゐる
我が夫は友のクルマが夕闇に消えゆく彼方じつと見てゐる
退院にあらず転院の車椅子押して去りゆくこの病院を
もの言へぬ夫は常より深々と頭を下げて主治医に謝しぬ
出たいとて他に行き場所ありはせぬさりとて哀しき夫の眼差し

国坂峠

豊川 平松裕子

登りゆく国坂峠は霧深し友の培ふ畑も見えず

登りゆく程にますます霧深し国坂峠を越えゆく真昼間

ヘッドライトを点して走る真昼間の峠越えゆく親族^{うから}ら待つらむ

血の繋がりに無き伯父伯母も私には不思議な程に繋がりを

親族らは揃ひて母を見舞ひくるる我は悲しむ変れる母を

また来るねと言ふ親族らに顔しかめすぐ来るねと言ひ直させる母

夕陽受け豊川の上を高く飛ぶかもめの白き腹の光れり

我が店の開店の日の瘦せベゴニア君が玄関の鉢に盛り上がる

店の前に車を止めて入るでもなし運転席の人の気になる

朽ちてもろき竹の垣根に絡まりて鉄線の若き蔓の伸びをり

菩提樹

豊川 小野可南子

寿恵先生立ちゐますかに声とする菩提樹の下枝のこのさ緑を

小さき蕾の連らなり揺るるさ緑よ菩提樹ともに見上げしことも

咲き分けの鉢の皐月の散る花よ赤白斑入りいとほしきもの

葉替えすみ楠の大樹は花の季淡き緑の粒々小花

門冠りの松の下かげに身を寄する五月の強き陽射しもどりぬ

出掛けむと立ちたる我にやや離れフアッションチエックと千尋の目線

知る人の一人とてない待合室そほ降る雨を独り見てゐる

方形の窓を額縁赤々き萌えたつばかり赤目櫨の葉の

見放さくれる赤目櫨の生垣のやはらかき葉を揺らす風なく

祭りとして賑はふ芝生の足元を触れむばかりにツバメの飛翔

麦の穂

豊川 山口千恵子

さながらに五月の色は緑色つくつく伸び来し麦の穂靡く

かさかさと葉替への落葉踏みてゆく悠久の時経て来し大楠

出揃ひし麦の穂さながら靡かせて柔らかに風の吹き渡りゆく

鬱うつと過ごせる春の日のゆけり瓶の蜂蜜白く固まる

飛び立てる雀を素早く獲え去る朝の野に見し黒鳥のこと

一瞬に雀啞へて去る鳥天空のこと地上に見上ぐ

家々に明りほのほの点る夕団欒あらむそれぞれのもと

新しき二つの白きマグカップ湯気白しろのミルク注ぎ分く

植木畑の中に存在示す如白しろ花咲くなんじやもんじや

黒メダカ五匹のうちの一つ死ぬ残れる四匹甕にすいすい

防人の地へ(2)

豊川 夏目勝弘

能古島にそぞろと降りくる観光客島に一台のタクシーを待つ

也良岬の此処この場所は防人に見張りにつかせし最前線ぞ

波穂なき青に淡墨の志賀の島万葉人の荒雄しあはれ

妻と共に来し防人のありといふ残島のこしまここがつひの住処に

能古島に今に住み居る島人に防人たちの子孫のありや

南海のアジアの島々に日本兵と係はりありし子孫の居りぬ

国守る元寇防塁げんこうぼうれいの二十キロ御家人せかされ構築せしや

石塊をひたに集めひたに積み高さ八尺に元軍防がむと

東国の防人が国を守りにき今の国防アメリカ頼み

沖つ島鴨とふ船の今はなし三角白帆のヨットの浮ぶ

たんぽぽ

「招待」 秋山逸穂

夜の道におとされている手袋を落花ひそかに隠しゆくなり
青空と浮雲ひとつと春の風たんぽぽの咲く野にねころびぬ
いつせいに咲きはじめてたる花水木街灯のしたに白くかがやく
五万本のチューリップ畑を見はるかし陽射し浴びるはのびのびとする
ガタゴトと路面電車にゆられつつ遊園地にいる錯覚たのし

五月雨

大阪 伊藤忠男

水玉の重みを受けてしなやかに若葉の茎の枝垂れていたり
ガラス窓に落ちる雨粒すじなして速さますなり通勤列車
久しぶり澄み渡る空深呼吸福島への思いは去らぬ

ユキヤナギ

豊川 白井信昭

ぬばたまの夜のユキヤナギ窓越しに白白として余震ありつつ
はらはらと舞ひ落ちるなり庭隅にユキヤナギの小さき花びら
裏窓の常の景色もこの朝はすっかり黄砂に覆われてゐる

『いしよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

この朝も大根おろし小女子とけふの一日がはじまりてゆく

岩瀬 信子

もうすぐに研修了へるらし孫娘赴く先は何処ならむか

三田美奈子

わが庭の睡蓮鉢にさくら花幾ひら浮きをりなぜか哀しも

稲吉 友江

石段を二月堂へと共にのぼるかつて我のみ上りし石段

鈴木美耶子

初孫と宮参りする八王子さま今朝の春日の風ほのかなり

吉見 幸子

波寄せてこの堤防に潮満ちる海を向かうに生活くらす私

牧原 正枝

綿毛

東京 阿部 淑子

春風に綿毛のタンポポゆれている幸せの種今飛びゆかむ

巨大なる津波に残りし一本の古木の梅に満開の花

つつがなく過しきたりぬこの日々を菖蒲咲きそみ今日誕生日

「俳句」

轟音は雲の中なり菘豌豆

植村公女

育メンの紐ゆるびをり若葉風

(育メン Ⅱ 男の子育)

ほろほろと妹壊れゆき夏きざす

牛の目は青葉映して曳かれ行く

一石

燕来る旅路の果ての戸惑ひや

梅雨空やまして心は暗れやらず

青田風画架を背負へる流寓の徒

喜仙

空の青うばふ大樹の白木蓮

天に向く枇杷の萌葱の新芽かな

窓ガラスに吸着四足ヤモリかな

皓一

雲垂れて縦横無尽夏燕

雨降りてドクダミの白浮きたちぬ

私の一首

痰切りを拾ひて食ぶれば風邪引かぬ言ひ伝へあるに競ひて拾ひき

伊与田広子

これは私の子供の頃の思い出ですが、当時は粉と一緒に小さな痰切も撒かれました。それを大人も子供も競って拾ったものです。これを拾って頂くと風邪を引かぬと言っていますが、私は風邪をよく引いたので、母が私に言ったと思います。本質は厄避けの痰切りだと思います。今では衛生面を考え小袋に入れて粉と一緒に撒くと思います。撒いた粉の跡は残ってをりますが、痰切の跡はありません。もう七十年近く見たことはありません。一度見たい。

けふもまたけふのみ空の春色よ仰ぎて何も思はざりけり

岡本八千代

今日もまた、見上げた空は春の色だった。私だけが感じとった「春色」である。あらゆる草木に新緑が芽ばえはじめ。実に明るい初々しいうす緑色の空。それは私の心でもあった。ただそれだけであった。

「春色」は、「春の色」と「の」を入れたくなかった。漱石の「草枕」の中にたしか「春色」のことがあった気がする。大切にあなたためていたことばでもある。「何も思はざりけり」に心をこめたつもり。

月の無き今宵の空の星々よ雄々しく明るく冬の大三角

小野可南子

孫達の会話に「夏の大三角、冬の大三角」という言葉が度々聞こえておりました。私も孫達の会話に参加しようと、星座表を調べその冬の大三角を知りました。

二月の夜空、オリオン星座に寄りそうように明るい星の三角が輝いていました。

頬に冷気を感じつつ、それでも孫達といっとき、南の空のペテルギウス、シリウス、プロキオンと指さしながら明るく輝く星座を見上げた楽しい夜でした。

贈呈誌 五月号

「明治記念統合短歌大会」

特選歌

相澤大也

「青森アララギ」

相馬富美子

紙一枚書式が少し違ふだけ死亡届と出生届

手入れなき小庭の隅に秋海棠降りしきる雨に細かく揺るる

入選歌

藤井常世

「愛媛アララギ」

大内富士子

ほつこりと小雪を積める形してあしび咲くなり飛火野の径

カーテンを開くれば敷石が濡れてをり夜半に静かに雨が降りしか

佳作

ハインズ邦子

「鹿児島アララギ」

堀之口ふさえ

生れし地の自然守りし棚田鋤く花筏流るる川の水入れて

若葉萌え勢ふみれば老いたりと籠りてをれず庭に降り立つ

小・中・高生秀逸作

五歳 大嶋舞香

「高知アララギ」

竹崎香澄

かみさまのもりでひろつたどんぐりをなかよくたべて山のくまさん

椎の実を拾う石段手の先に腹をすりつつ歩く螻蛄

サッカーの選手の僕は心までボールとなつて宇宙に飛びゆく

「滋賀アララギ」

桐畑福美

休日に家でのんびり小説を読んで気づけばカレーの匂い

予定なき一日とあらば電話する友の予定を聞くこともなく

過去を消す消しゴムなんかないけれど新たな春が上書きされる

「柘」

篠原信子

しとしとと雨昨日より降りつづくムスカリの花のムラサキ濡らす

こもり読む夫にも慣れてふたり居の音なき家にこころ安らぐ

花萼の緑葉分けてつくつくと茗荷の新芽するどく立ちぬ

「冬雷」

山田和子

しとしとと穂昨日より降りつづくムスカリの花のムラサキ濡らす

「群山」

伊達宮子

「穂の原」

荒井榮子

山茶花の絞りの花の二つ三つ凍てつつ咲けり春近かからむ

「榎の木」

平松利支

人來れば下に住む吾の出る役と膝さすりつつ立ち上りたり

絹の話 (7) 「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

七夕まつりは絹祭り

今日の様な七夕祭りがどこで起こったか定かではない、中国の古文書等にもそのような記述はないようです。ですから自由な想像をめぐらすのもたいへん面白いので、少し遊んでみましょう。

絹は中国で5千年も前から産業として生産され始めた事は以前に書きました。ここで言う絹とは地球上に生息する10万種類余の絹を作る生物の中から、繭を作る昆虫を選び、野外には蓑虫や柞蚕の様に比較的大形で主に茶褐色をした繭は数多くあるのに、桑の葉を食べる小さくて頼りなげなクワコと云う白い繭を永きに渡って改良を重ね生糸を採る事に成功した、今日で云う家蚕繭から採る絹を言います。その頃、世界各地で人々はその地域にある各種野蚕繭から糸を紡いで利用してきた様です。生糸とは蚕が吐いた一本の糸を何本か寄せ合わせた物(当時の繭からは300m前後、現在の繭からは1500m前後)。生糸を精錬すると、紡ぎ糸に比べ格段に艶が有り、薄く、しなやかで、当時としては何物にも比較出来ないほど美しかったと思われれます。それに比べて野蚕の繭から糸を採るのは、繭からスルスルと糸が出て来なく、

苦労するばかりで生産が上がりません。今日でも同様です。そのような事から桑コに着目したのは当然と言えるでしょう。この成功は今日の原子力以上の意味を持つていると言つても過言ではありません。

こんなに美しい物を権力者が看過する訳がありません。殷や周のように強大な権力が確立されて来ると、絹の生産、販売等を手中に収め莫大な利益を得られる様になり、権力の基盤も安定して来ます。その頃には天文学も発達し星座にまつわる色々な話が一般に語られるようになっていたと思われれます。

春の桑の葉を食べて育つた蚕が6月上旬繭を作り、生繭を乾繭にして、生糸を採り、織る人に手渡す頃が丁度、天の川がきれいに見える頃になります。牽牛(養蚕夫)から織女に渡る時です。

絹づくりのめやすは七月七日が農から工へ移行する時とし、天子は美しい織物が出来る様に天の川に祈り、庶民は絹増産のお祭をしました。繭の生産は夏コ、秋コ、と休みなく早朝から深夜まで寝る暇が無いほど過酷な作業が続くので、その中間の梅雨の晴れ間の様な骨休みの一日なのです。今日で言えば、村興しの殖産興業祭りでしょうか。七夕まつりを星祭りにしたのは、美しい織物を織るには少し湿度のある人のざわつかない静かな夜です。静寂で銀河の降る様な夜には透ける様なしなやかな物が織れると信じられていたのでしょう。今でもイ

ンドでは深夜戸を開め、織り上がる迄家族とも会わず、一気に織ります。

中国は古代からの王朝も絹の生産方法を秘密にしてみましたので七夕まつりが絹の振興祭りであれば、その本旨は物に記したりしなかったと思われるので、本当の事が伝わっていないではないでしょうか。3000年ものながきに渡って絹の製法の秘密を守り通して、その独占的利益で栄華を築いて来た執念には敬服するばかりです。

今日でも中国は最古の古代繭をえんえんと毎年採卵して、種の基を保持していますが、世界の学術会議であろうが何であろうが、決して公開しません。日本でも蚕種を保存するセンターが小淵沢に有りますが、明治以降のもので、中国に比べればほんの僅かなものにすぎません。絹5000年の歴史の中で日本が中国に勝るのは明治前期より以降100年にすぎず、昨今では質量ともに比較になりません、絹及び蚕がレアメタルの様に先端産業に不可欠な物になる時代が来ないとも限りません。

七夕まつりには誰も語らないもう一つ大事な事が隠されています。七夕には竹に短冊を吊るします。今日では色々な色の紙の短冊ですが、本来は絹紙の短冊を吊るすのです。

繭から糸を作る過程で、毛バや屑糸等沢山です、殆どは糸糸等に加工しますが、ほこりの様な屑、使いふるしてボロボロになった古

着等を細かく切って、トロトロになる迄煮込んで漉いて紙を作ります。この紙の短冊に願い事を書いて吊るすのです。七夕まつりは紙作りの祭りでもあるのです。

絹は余す所なく使うエコ産業なのです。そのような利用方法は今日では紙への利用はほんの少ないですが、パウダにして、化粧品やサプリメント、食品添加など中広く利用されています。

紙と云う字には糸へんを書きます、糸と云う字の象形文字は三つの繭から三本の糸がよじれて上がって行く様子を表したもので、漢字が出来るとき、絹を使って出来ている物は糸へんを書いたのです。ですから絹は絹綿を表し、棉は木綿綿を表します。漢字ができる頃までは紙は絹で作られていたのでしょうか。

学校では紙は古代エジプトでパピルスから初めて作られたと習いましたが、実は中国のほうがもっと古いようです。

古代の七夕の短冊に色々な色の短冊があったかどうか知るよしもありませんが、絹は木綿と違って非常に染色性が良く、ムラにもなりにくいので、草木で染めた色とりどりの今の紙より少し厚めの短冊が風になびいていたと思うと実に心豊かになります。

いにしえの様に絹漉紙の七夕まつりをしてみたいものです。

物理学者と詩歌の世界 (18) 一 朝永振一郎

一石

朝永振一郎(1906-1979)は哲学者朝永三十郎の子として東京に生まれる。1913年、父の京都帝国大学教授就任に伴い京都に転居。京都一中、第三高等学校、京都帝国大学で学ぶ。中学校以来同窓であった湯川秀樹(参考資料1)とは終生の親友であり、ライバルであった(参考資料2)。

1931年、理化学研究所仁科研究室の研究員に着任。ここでマグネトロンが発振機構の研究等を行う。ドイツのライプツィヒ大学に留学し、ヴェルナー・ハイゼンベルク(参考資料3)の研究グループで原子核物理学や場の量子理論を学んだ。

1941年、東京文理科大学(後の東京教育大学)教授。プリンストン高等研究所に滞在し、量子多体系の研究を行なう。またハイゼンベルクやヴォルフガング・パウリが構築した場の量子論を相対論的に共変な形式に改めて定式化した(1943、超多時間論)。さらに量子電磁力学の発散の困難を解消するための繰り込み理論を形成。繰り込みの手法を用いて、水素原子のエネルギー単位に見られるラムシフトの理論的計算を行い、実測値と一致する結果を得た(1947)。また第二次世界大戦中にはマグネトロンや立体回路の研究も行なった。この研究により小谷正雄と共に日本学士院賞を受賞(1948)。

量子電磁力学の発展に寄与した功績により、ジュリアン・シュウインガー、リチャード・ファインマン(参考資料4)と共同でノーベル物理学賞を受賞した(1965)。理論物理学者ダイソンは、回想録の中で次のように述べている。「戦争の荒廃と混乱のさなかにある日本で、国際的には完全に孤立した状態にありながら、朝永は理論物理研究集団を維持し、ある意味では世界のどこよりも進んだ活動を行っていた。誰の助けも借りず独力で、シュウインガーより5年も前に、ロンビア実験の助けもないところで、新しい量子電磁力学の礎を築いたのである。…吾々には深淵からの声のように響いた」(参考資料5)

その後東京教育大学長、日本学術会議会長を務めた。著作には『量子力学』、『鏡のなかの世界』、『スピンはめぐる』、『庭にくる鳥』、『朝永振一郎著作集』、第1巻、第1-2巻(いずれもみすず書房刊)、『物理学とは何だろうか。上・下』、岩波新書などがある。

1950年代当初、原子力の利用にはバラ色の夢が語られていた。しかし東西冷戦のさなか核兵器開発競争、ビキニ事件、大気圏核実験などによって人びとは科学技術の進歩が人類の生存にまで関わる事態を引き起こしていることを認識した。湯川や朝永が打ち込んだ原子核や素粒子の研究と原子力の登場はまったく無縁というわけではなかった。彼らは物理学者としての責務から逃れることなく、核兵器廃絶の国際的運動に連帯して行動した。1955年に発足した『世界平和アピール七人委員会』には湯川、朝永(やや遅れて)共に参加した。七

人委員会は、日本国憲法の平和主義を尊重して、核兵器の廃絶を求め、アピールを出してきた。また1957年、核兵器廃絶を訴えたパグウォッシュ会議（カナダ）に朝永も湯川と共に参加。このあと、朝永の働きかけにより日本パグウォッシュ会議が発足した。

湯川は、鋭い直感に基づいて物理と社会の問題に取り組み、「核兵器は絶対悪であり、人類は核兵器と共存できない、紛争は平和的手段で解決しなければならない」と説き続けた。これに対して朝永は物理も国際社会の問題も緻密に分析した。戦後の彼らの行動の一端は、学術・科学界の復興であり、核兵器をめぐる平和の問題であった。また科学、学術、文化一般についてのさまざまな社会的発言から人々は科学者の知性と良心を知ることができた。この時代の著作には『核時代を超える平和の創造をめざして』、湯川秀樹・坂田昌一 共編、『核軍縮への新しい構想』、湯川秀樹・豊田利幸 共編（いずれも岩波書店刊）などがある（参考資料6）。現在、科学と科学者の社会的イメージは大きく変貌している。「核の平和利用」を標榜して登場し、国のエネルギー政策に深く食い込んだ原発の問題、あり方も含め、改めて彼らの生き方・思想から学ぶことは多い。

朝永の残した言葉から。

○「ふしぎだと思うこと。これが科学の芽です。よく観察してたしかめそして考えること。これが科学の茎です。そうして最後に謎がと

ける。これが科学の花です。」

○「科学というものが人間を幸福にするようにしかならないものだということがそこに内在しておれば、実はありがたいんですが、私はずうはなっていないと思います。むしろ、そうはなっていないところに人間の尊厳が認められねばならない理由があると思う。」

○「科学が実験室から一歩外に踏出すときには、それは毒であり、かつ薬である。というのは自然科学の方法論の中には真か偽かという意味の価値はありますが、善か悪かという価値はできるだけ切り捨ててきていたからだ。」

参考資料

- 1) 三河アララギ、湯川秀樹、P 40、第57巻、第3号（2010）
- 2) フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』・朝永振一郎』
- 3) 三河アララギ、ヴェルナー・ハイゼンベルク、P 36、第57巻、第11号（2010）
- 4) 三河アララギ、リチャード・ファインマン、P 36、第57巻、第12号（2010）
- 5) フリーマン・ダイソン、『宇宙をかき乱すべきか。ダイソン自伝、上・下』、筑摩書房
- 6) 佐藤文隆（監修）、『素粒子の世界を拓く―湯川秀樹・朝永振一郎の人と時代』、湯川・朝永生誕百年企画委員会（編集）

鎌田敬止という人（五十五）

「月虹」 鮫島 満

白玉書房時代

〈高村光太郎との交流（17）〉

昭和二十六年に『智恵子抄』が再び龍屋閣から刊行されるに至った経緯について触れておきたい。

澤田伊四郎が休業していた龍屋閣の再興を考え始めたのは、鎌田の『智恵子抄』出版を「フンガイ」したころ、すなわち昭和二十二年末か二十三年の始めであろう。ところで澤田の「フンガイ」の情報もたらされた時点では光太郎と澤田の交流は、光太郎の更科源藏宛書簡に「澤田伊四郎氏は終戦後あまり便りなく、現在の住所は知りません。」（昭和二十三年五月二十四日付）とあるところを見るとまだ復活していないようである。

白玉書房から『智恵子抄』を取り戻すことを決意してしばらく静観していたと思われる澤田が動いたのは昭和二十四年である。その動きを光太郎の日記によつて確かめたのだが、実は昭和二十四年二十五年分が発見されておらず、全集には「通信事項」が収録されているだけである。この記録は日々の通信を「受信」「発信」の欄に書き込む方式になっており、幸いなことに光太郎はこれを実に細かく記録している。

これによると何年ぶりに澤田から便りがあったのは昭和二十四年五月九日で、「澤田伊四郎氏よりテカミ」とある。次の便りは同年八月十二日で、「澤田伊四郎氏よりテカミ及小包 作業服一着、夏ズボン一、軍手2組 冬手袋カバー、DDT一かん」とある。物資窮乏の時代に辺境に住む光太郎が要求したものが、再接近を計る澤田が自主的に送ったものかは分からない。三通目は「澤田伊四郎氏よりハカキ及『明治屋食品辞典』（八月三十一日付）」と記録されている。

この年十月三十一日の記録によると光太郎は雑誌「新女苑」新年号のために詩六篇を書き、「智恵子抄その後」と題して担当者の粕谷正雄に送っている。「新女苑」新年号の発行月日は今わからないが、十二月初旬であったと思われる。

光太郎の記録に澤田の四通目が「澤田伊四郎氏よりテカミ（『智恵子抄その後』出版したしとの事）」とあるのは十二月十七日だが、おそらく澤田は「新女苑」新年号を見たのであろう。光太郎への再接近をはかっていた澤田にとつて絶好の作品だったはずである。ところがこの手紙に対して光太郎は、「『智恵子抄その後』出版出来難き旨」（十二月二十一日付）を書き送っている。その後、この年は十二月三十日に「澤田伊四郎よりテカミ」とあり内容については記録がないが、重ねて出版を頼んだのではないかと思われる。

明けて昭和二十五年二月八日の欄に「鎌田氏へハカキ（『智恵子抄その後』を澤田氏が望んである事）」と記録があり、そのハカキには、「過日澤田伊四郎氏からテガミがあり、『智恵子抄その後』を一冊として

出版させてくれといつて来たので当惑してゐます」(二月八日付)と書いています。

ここで考えなくてはならないのは、光太郎がなぜ「当惑してゐる」ということである。かつて光太郎が澤田に深く感謝しており龍星閣の再興のときには力を惜しまないと鎌田への書簡に書いたことがあったことを思うと、この光太郎の「当惑」は不思議である。想像されることは、この時すでに「智恵子抄その後」の出版が鎌田との間で約束されていたのではないかということである。この前日付の鎌田の光太郎宛て書簡に、「知恵子抄この次ぎは一九五〇年版、新しい装釘で出させていただくこと非常に楽しみです」とあるのがその約束である可能性が高いからである。

光太郎の当惑をおそらく知らないであろう澤田は積極的に話を押し進めて、光太郎に、「澤田伊四郎氏よりハカキ(胃病の由、そのうち来訪との事)」(昭和二十五年四月二十八日)と記録させる便りを出している。そしてついに出版の承諾をとりつけることに成功する。それは光太郎が宮崎稔に宛てた、「此間澤田伊四郎さんが突然来訪、懇願されたので『智恵子抄その後』六篇と戦後の雑文を一冊にまとめて出版することを承諾しました」(昭和二十五年五月二十九日付)という手紙によって分かる。

この印刷が始まって後の澤田宛の光太郎書簡には、「『寸志』忝くうけとり(中略)山の木を伐つた金と知るとおろそかに出来ない気がし

ます」(昭和二十五年九月三十日付)あり、澤田が原稿料や印税とは異なる「寸志」を贈るような気遣いをしていることが分かる。

光太郎の「あとがき」原稿を受け取った澤田は光太郎に対して、「智恵子抄」について「正当な場所に還して頂き、私が改装新版して出すのが本当と思ひます」(昭和二十五年十月五日付)と書いた後、「『智恵子抄』は私が休養中、『他の出版社が譲り受』とあるところは、小生が金銭をとつて出版権を売つたかのやうにうけとられるおそれが御座いますので」と書いて、「あとがき」の書き換えを要望している。これに対して光太郎は、

澤田氏を澤田君とする事むろん結構です、○「他の出版者が譲りうけ」はなるほど間違つてとられさうだと気づきましたから、「他の出版者が澤田君の快諾をうけ」と訂正します、それから、その項の終りの、○「まづ私の『智恵子抄その後』に眼をつけたものと見える」は「……眼をつけた。」と訂正します。

(昭和二十五年十月八日付)

と書いている。著者に、それも高名な高村光太郎に「あとがき」の表現のあやの書き換えを出版者が要求するのは異常といえれば異常だと思われるが、澤田にはどうしてもそうせずにはいられない感情の動きともくろみがあったのである。

和歌から派生した季語の本意（その十二）

「笹」 佐藤 喜仙

33 秋近し（秋隣・秋の境・秋迫る・来ぬ秋）

「夕立に夏はいぬめりそぼちつつ秋の境に今や至らむ」

詠み人知らず（古今六帖）

「夏と秋と行きかふ空のかよひ路はかたへすずしき風や吹くらむ」

凡河内躬恒（古今集）

暑い夏もようやく終りに近づき、朝晩には少しく涼風を感じる頃のことである。「夜の秋」等の季語もあるから、やはり夜の涼しさは秋が近いことを伝えている。春と秋は、冬の寒さから、あるいは夏の暑さから解放されるので昔から特に待たれた時候であったことが分る。

例句

秋ちかき心の寄よや四畳半

芭蕉

燈台に灯すころや秋隣り

蛇笏

暁の雲をさまらず秋近し

紅緑

34 撫子（河原撫子・浜撫子・姫撫子）

「高田たかまの秋野あきのの上の瞿麦なでしこの花うらわかみ人の挿頭かぎしし瞿麦の花」

丹生女王（万葉集）

「秋のみやあわれと思はむきりぎりす鳴く夕かげのやまとなでしこ」

素性法師（古今集）

撫子は山野に生じる日本古来の花で山の上憶良によって「秋の七草」

に加えられた。同種の石竹「唐撫子」の名に対し、大和撫子と呼ばれている。可憐な花である。

例句

撫子やそのかしこきに美しき

惟然

撫子や濡れて小さき墓の膝

草田男

茎ながき撫子折りて霧に待つ

俣二郎

35 空蟬（蟬の殻・蟬のぬけがら）

「空蟬のからは木ごとにとむれど魂のゆくへを見ぬぞ悲しき」

詠み人知らず（古今集）

「いまはとて梢にかかる空蟬の殻を見んと思はざりしも」

平なかきが女（後撰集）

空蟬は空しいこと、はかないことの代名詞のように古来より使われてをり、現代でも同じである。その感情の源は、まず蟬は幼虫時代は土中に数年から十数年いて蛹となり、蛹が地上に出て木に上り、背より割れてその皮をぬぐ。ところが蟬の成虫としての地上での生命は一週間前後でしかない。にもかかわらず蟬の抜殻「空蟬」はしばらくの間木に留まったままであることがこの世の万物のはかなさの象徴とされるのであろう。

俳句

わくら葉にとりついて蟬のもぬけ哉

蕪村

空蟬をひろふ流人の墓ほとり

林火

拾ひ来しうつせみ卓におきしのみ

敦

「氷魚」のことから (126)

岡本八千代

第十六回 さまざまの人の心や百花園

非風道人稿

もう、九州の方から梅雨入りらしい。夜来の雨に庭の月見草の花、花が、萎れて雫を落している。——原発の収束はいつのことかわからないまま——。

最近読んだ「子規、最後の八年」(関川夏央著)に、「明治二十九年六月十五日、三陸海岸を襲って死者二万七二二名を出した『三陸海嘯』(津波)」と。(以下P.95参考)

明治二十九年といえば、子規はその頃から新体詩にも興味を持っていて、詩を書きはじめていた。そして、明治三十年の一月頃からの発表が多くなっていった。発表は「明治二十九年」と題して、中村不折の挿画を添え、叙事詩を子規作として「日本」に載せた。

太平洋の水湧きて

奥の浜辺を洗ひ去る。

あはれは親も子も死んで

屍も家も村も無し。

○人すがる屋根は浮巢のたくひかな

と、詩のおわりに俳句を一句そえてある。

子規が、当時の津波の恐ろしさを直感にとらえて写生していることに私は驚いた。しかもその写生の中に子規の魂がこめられていることに感動した私である。——。

「山吹の一枝」のつづき——。

○今は梅のまつ盛り、向島の花やしき。この園に訪ずれる人々は、日曜日とあつてさまざまな人、老若男女を問わずにぎやかであった。
○「紀尾井のためには山尾が杖」：道ながらも諫められつつようよう梅屋敷まで来た。

○そこで赤羽織の坊主頭扇子片手の善孝に出会った。(芸妓付の人?)次に、小松芸者を知っている老婆に出会い、また次に芸者風の女に出会い、それぞれ、小松のことを言う。

○山尾はその情景を目の当りに知って、「オイ紀尾井、『僕が現在見ていた通りア、下等な人物と交際して、サア交際でなくつても知り合いなつていればだんだん高尚の理想も消滅すると云うもんだ』と。

○——、梅園を山尾と紀尾井が歩いていると、一人の芸者が、一人の男とつれだっていた。それは小松と男の客であった。

第十七回

花ぬす人稿

○山尾はついに芸者小松に逢つて、紀尾井と手を切つてもらうように頼む。

「たった今、紀尾井の手をさつてくれないか」と……。

ここで、「山吹の一枝」の小説は終わった。この制作年代は、明治二十三年以後、二十五年以前と推測されている。主要人物の紀尾井三郎のモデルは五百木飄亭とされているようだ。書生物語の友情を感じさせる小説と思う。

ことのはスケッチ (391) 今泉 由利

「泥大島」

四月は父の五月は母の、誕生月。六月は父が、七月は母が亡くなつてしまつた月。

とてもとても父を、母を。何言わなくても分かり合えた日々。小さかつた時は、父にも母にも、少し離れて憧れていた。近寄ることに遠慮をしていたのだった。

長じては、文学、絵画、染色、織物：父母と同じ興味を分かち合うことができた。

学生だった頃、「結城紬の体験をしたい」と報告すると、すぐ父から「結城知るべし」と葉書が届いた。父母のサポートを受け、結城の里で、真綿から手摺りの糸を紡ぎ、腰と足とでバランスをとる「いざり機」の実習をしていたり、茜染、紅花染、南部紫根染、仙台平、刈安染めの黄八丈、ハマナス染料の秋田八丈、弘前のこぎん刺し、西陣のつづれ織り、手描き友禅：伝統の工芸を守っておられる方々直々の指導を受けていた。

さんが織という織元で丁稚奉公をしていた時があつた。トイレ掃除などして私の宝づくりの時だったのだな。

そして、その頃には、もう会えないかもしれないと思える外国へ行ってしまふことを考えた私に、父母は、日本の伝統の品々を揃えて持たせてくださったのだった。

その中には、泥染めの大島紬の袴と単衣と。

今、東京のひとりの家で、母の泥大島を羽織ってみる。何と美しい…。

奄美大島の泥染へ行ってみよう…。

絹を研究している「従妹」が、梅雨の時を狙って「泥染にゆく」という。付いてゆく。

日本列島をまっ白く覆う梅雨の雲の中を、飛んで飛んで…奄美大島。雨は降り、声はすれど姿の見えないアカシヨウビン。深い緑の山懐。伝統工芸士の野崎松夫さんの教えを受ける。

まず目に入るのは、巨大な釜。車輪梅の木の荒削り材を入れて、長く煮だし媒染液をつくる。この液を、熱くしたり、ぬるくしたり石灰を入れたり…その都度にあわせる。

東京辺りでは、車輪梅は生垣になっていて白い花が咲き、その木を灰にして媒染にするけれど、奄美では、車輪梅は大きな木になるらしい。車輪梅の液に浸し、絞り、また浸し…三度くり返した布を、田泥につける。

緑青色に美しい金魚藻を掻き分け、田んぼに入る。裸足になつて土を踏んだこともない足に、ニユルル…だけではない。小枝らしきがつくつくとして、自身の体重をかけて立つことへの戸惑い。冷たい。ピクツと触るものもある。

鉄分を多く含むという粘土を布に擦り込み…田の上澄部分で濯ぎ、また泥につけ…を三度くりかえす。車輪梅の液に戻り三度をくり返し…田んぼに戻り、同じ三度をくり返す。好みの染め具合を求め、一日中でも、何日間でもこの中腰の作業は続く。

染める前の、糸を作る、緋をくくる、染める。そして織機にかける、織りあげる。気が遠くなるような作業が続く、私の大島紬の着物は出来たのだったことを知る。ありがとう。ありがとう。ありがとう。

和菓子街道 (57)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

桑名での寄り道が過ぎたが、先に進もう。安永を経て、5つめの川・三滝川を渡った辺りからが四日市の宿内。四日市名物といえば、天文19年(1550)創業の笹井屋の永餅だろう。

戦国武将・藤堂高虎が、まだ足軽だった頃のこと。笹井屋の前を通った高虎は、出世払いの約束で永餅を食べさせてもらった。餅はすこぶる美味しく、しかも「永餅」という。高虎は「吾れ武運の永き餅を食うは幸先よし」といっていたと喜んだ。後に出世し津藩主となった高虎は、笹井屋の主人を召して過日の礼を述べて厚く遇したという。以来、参勤交代の折には必ず笹井屋に立ち寄って永餅を賞味したのだとか。

当時は四日市の西の日永の地で商いをしてきた笹井屋だが、今



は先述の三滝川を渡った所に店を構えている。講談の主人公気分です永餅を味わって、ついでに出世街道も…などと夢を見つつ東海道を行く。

餡入りの細長い焼き餅。長いからではなく、日永で生まれたから永餅なのだ。

◆笹井屋

住所：三重県四日市市北町5-13

電話：0593-51-8800

お知らせ

▽八月号原稿は、七月一日(金)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しない、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

「イベント便り」

○森からの贈り物―長谷川千代「ワイルドシルクフェア」

於、静岡伊勢丹8階プロモーションスペース

六月十五日(水)～七月二十一日(木) 十時～十九時三十分

(最終日 十六時閉場)

○「シルクに聞く」～「日本発、ニューシルクロード」

於、東京農業大学「食と農」の博物館

〒158-0098 東京都世田谷区

上用賀2-4-28

TEL 03-5477-4033

FAX 03-3439-6528

開館時間 午前十時～午後五時

休館日 月曜日、最終火曜日

(四月～十一月)

編集後記

△東日本大震災、原子力発電所事故など、日本全体が大きな被害にあり、悲しみに陥り、もう三ヶ月になろうとしています。被害を受けた東日本をはじめ、日本国内が不安と混乱に沈み、今も安心できる状態ではありません。

我が町の田畑の小麦は色付き、田植えを待ち起耕された田など……。平凡な日常がいかに尊いものであるかを改めて思いました。かけがえのない人命、家、田畑、自然その他諸々の貴重な財産を失いました。

かけがえのない日常が一日も早く戻ることを祈るばかりです。

私たち三河アララギ会員は、心を静めて平常心をとり戻し短歌の心を培ってゆきたいと思います。

(山口)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年分二万円、一ヶ年分三万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二万円、一ヶ年分四万円とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十三年六月二十五日印刷 第五十八巻 第七号

平成二十三年七月一日発行 定価 六 百 円

編集部 岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

発行人 平松 裕子・山口 千恵子

発行所 今泉 由利

三河アララギ会

三河アララギ発行所 〒四四二-〇三二一

豊川市 御津町 御馬 西三七

TEL (〇五三三)七五-二〇〇九

振替口座 〇〇八三〇-六-五六三二九

E-mail yun88@cronos.ocn.ne.jp/

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所 株式会社 桜 創 美

UR L

UR L